北水試百年こぼれ話 ⑪ 研究者とペンネーム

キーワード：明治30年の北海道庁水産課員写真、出所発見、北海之水産、研究者、ペンネーム、秋味三平

まず本題に入る前に、北水試こぼれ話シリーズの第①回（北水試だより77号、2009）で紹介した「明治30年の北海道庁水産課員の写真（写真１）」の出所が判明したので報告します。

きっかけは、同僚からの「外部の研究者からの依頼で、北水試の倉上政幹元場長のイワシの文献を探して欲しい」という頼まれごとでした。依頼された文献名は「北水」というわかりにくいものでしたが、中央水試図書室所蔵の北海道水産會発行の「北海之水産」49号（1933）の中で発見し、どこかで見たような口絵（表が写真で裏に説明書き）が付いていることに気づきました。前後の号を確認したところ、51号（1934）に「秋味三平」氏が投稿した「三十八年前の水産課員を語る」が掲載されており、しかも口絵（写真１）のページが切り取られていました（写真２、３）。

ちなみに表紙には「倉上政幹氏の蔵書印」が押印されており、寄贈文献のようです。

写真１　「北海之水産」第五十一號の口繪（おもて面）

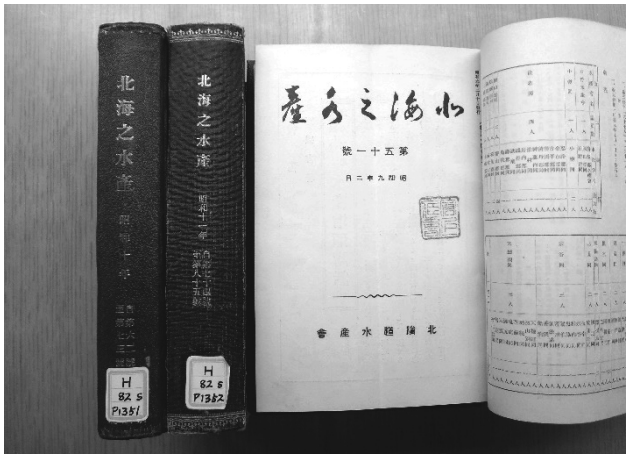

写真２　中央水試図書室所蔵の「北海之水産」と秋味三平氏の投稿文が掲載されていた51号の表紙（「倉上蔵書」という朱印が押されている）

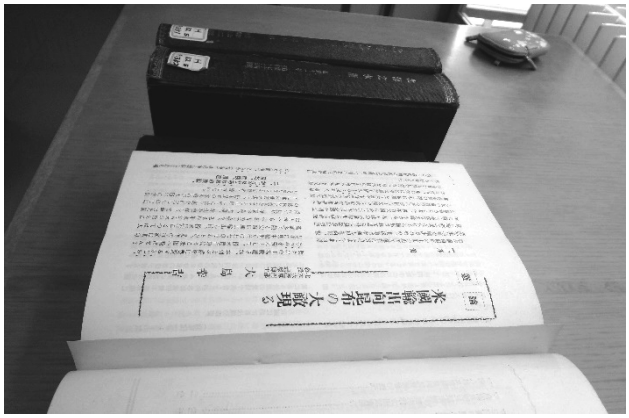

写真３　切り取られた口絵の跡

おそらく北水試50周年記念誌（未完成）を作成するための資料として、1950年当時の編集担当者が切り取ったものと考えられました。

なお、秋味三平氏は北海之水産47号（1933）に「鮭鱒孵化事業三十有二年の思ひ出」という投稿

をしており、この記述は「北海道鮭鱒ふ化放流事業百年史（1985、北海道さけ・ますふ化放流百年記念事業協賛会発行）」の第４章（372–373ページ）の元西別ふ化場長の内海重左衛門氏の経歴と回想を紹介した内容と一致することから、秋味三平氏は内海氏のペンネームであると断定できました。

ペンネームは小説家など著述業一般で使われますが、研究者は研究論文を書く上でその内容に対して責任を持ち、読者の質問等に答える必要から本名を使うのが一般的です。北水試の研究者では、大正時代から昭和の初めにかけて、趣味や批評・方言録といった内容を業界誌など一般向けの雑誌に投稿する場合に使用していた例が多く見られます。秋味三平氏の回想録は、痛快とも思える明治時代の北海道庁水産課員のはちゃめちゃぶりやさけますふ化事業の創生期に苦労された先人達への敬愛の思いがしたためられており、本名ではなかなか書けない内容と思います。

私が研究者のペンネームに興味を持ったのは、学生時代に研究テーマをスケトウダラに絞り、文献を手当たり次第に集めていた時に見つけた「朝鮮之水産（朝鮮水産會発行）」という文献でした。奇しくも今回紹介した「北海之水産」と同系列の文献です。その第28号（1926）に「北魚生」という著者が「めんたい片々」という題で、明太魚（めんたい＝スケトウダラ）の名の由来を「保証の限りではないが」と断った上で「五百年前韓北明川郡の太某と称する漁夫、初めて此魚を捕いて時の郡守に献し郡守即ち之を明太魚と命名せりと云ふ」と記述しています。しかし著者の本名はわかりませんでした。

なお「北海之水産」には1923年以前に「北海道水産組合聯合會と北水協會」から発行された同じ名前の雑誌があり、図書室には39号（1917）から飛び飛びに118号（1923年）までありますが、これにも著者特定不能な研究者のペンネームの例として、「北渓漁波」、「釣遊閑人」、「北冥漁叟」、「八十八生」などがみられます。

ただ「〇〇生」という「生」を最後に付けるペンネームが当時流行っていたようで、後継雑誌の「北海之水産（北海道水産會発行）」でも、「北水試」所属を明記した上で「きのした生」、「今井生」といったものがあります。これらは内容からも筆者（木下虎一郎、今井晴一）がみえみえでペンネームとは言えないのですが、今となっては著者が特定できるのでむしろ有り難いことです。

研究者の調査研究現場での思い出話や失敗談は、普段の職場の酒の肴として出るものの、数十年単位の「記念誌」でもあまり多くは残らず、昔話としての口伝も20年くらいが限界です。北水試の冷凍すり身技術の開発のように、日常の研究生活（北水試の場合は夕方の仲間との一杯飲み）の中での失敗に「発明」のヒントがあったという話は、ノーベル賞でもよく聞く話です。ペンネームに頼らずともこうした雑文を残すことは、温故知新の観点からも重要ではないでしょうか（自画自賛）。

さて今回の雑文の落ちですが、なんと残念なことに、15年程前に私自身が関わった北水試百周年記念事業の保存資料の中にこの切り抜きを発見できず、本物を元に戻すことはできませんでした。仕方なく当時作成した電子画像データからプリントして挟み込み、60有余年を経ましたが、修復しておきました。改めて古い資料をきちんと保存・管理していくのはなかなか大変なことだと痛感しました（反省）。

（吉田英雄　水産研究本部企画調整部

報文番号 B2405）